



# 朝日 21 関西スクエア 会報

Asahi Kansai Square21

2011.4

No.

133



—2010年度、企画運営委員をつとめていただきました。任期終了の間に東日本大震災が発生しました。中村さんご自身も1995年の阪神大震災で被災され、住民自助活動を今の「コミュニティ・サポートセンター神戸」(略称CS神戸)に育てられました。今回の大地震・津波をどう見えていますか。

震災の性格が、阪神の場合とは全く違うと痛感します。私たちの場合、街が崩れた、そしてがれきが残った。私たちは1週間も2週間も歩いて、廃材にふれて、自宅の名残、遺品を手にして、何が起こったのかという現実を受け止められたのです。でも今回、津波が街を流し去ってしまいました。自宅や近所の街並みの痕跡がなくなってしまったのです。被災者の方々は、自分の立ち位置というか、何を失ったのかという喪失感を実感するのに、私たちよりはるかに時間がかかるのではないだろうかと感じています。現実を受け止め、そのうえで次の一步を踏み出せる。だから、現実を受け止めるために、今回は、想像以上の時間が必要になるのではないかと、その点を理解しないといけないと感じています。

—阪神大震災の場合は、住民の自助活動として「水くみ110番」を始められました。

震災の前に地域の高齢者や障害者へのボランティア活動を13年、していました。震災にあって2週間街を歩き回り、いろいろな人と話をして、お年寄りたちが「水くみが大変や」というんです。地震は1月17日でしたが、水くみ出動は2月に602件、3月は201件でした。活動の事務所は、はじめは幼稚園の運動場を借りてテントを張って10日間、その後、医院の庭にあった倉庫で1カ月、そして区役所に頼んで公園にプレハブを2棟造ってもらいました。

「水くみ110番」を始めたのには、もうひとつ理由があったのです。震災前からのボランティア仲間で、神戸以外のところにいる人たちから、「応援にいきたい。でもどこにいけばいいのかわからん。現地に受け入れの拠点を作ってくれ」と言われたんです。その声にも背中を押されて、活動を始めました。

—今回の震災にたいして、関西からどのような支援ができるのでしょうか？

まずいまは、寄り添いのメッセージを送ることではないでしょうか。「一人ではありませんよ」「いけるようになったらいきますよ」という声が、どれほど心強かったか。励ましの心を、長く送り返せることは貴重だと思います。そして支援については、被災地が何をどこで求めているのかに耳を傾ける必要があります。時間が経つと被災生活は変化するからです。

## 被災地に寄り添いの「心」を 東日本大震災、関西からの模索

中村 順子さん (CS神戸理事長)



私たちの場合も、「水くみ110番」の後、春になると水道も出るようになって、今度は「家族の行方がまだわからん」「どこにいけばお店はやってるのか」という情報が不足していたので、「臨時かわら版」などをつくり、被災者が情報交換をできる集合場所を作りました。秋になると在宅生活している人たち、特に高齢の一人暮らしの人たちが心細い思いをしているという事情があって「ふれあいサロン」という寄り合い場所を、多いときで20カ所作りました。7カ所はいまも続いています。

今回の被災地で、これからどのような展開になるのか、被災地からの情報をきちんと受け止め、私たちからの支援につなげる態勢が大切だと思います。

—最後に、関西スクエアでの、この1年の活動の感想や、朝日新聞への注文をお聞かせください。

さまざまな分野の方々と交流でき貴重でした。ロボット、ジャズ、社会学、企業市民活動。私の活動分野では想像できないようなお話を聴き、生かしていきたい。

私たちの世代は新聞は日々の暮らしに欠かせないものです。しかし、若者は本当に新聞をとっていない。そのことに、私は非常に危機感を持っています。紙からネットに代わってしまうのでしょうか。若者と接する機会が多いのですが、広い視野というか、知識が偏っていると感じることが多い。一方で、自分の関心のある事柄にはとても詳しい。これは、新聞を読まなくなっていることと関係があるのではないかと感じるからです。新聞を1頁ずつめくって読むことで、世の中何が起きているのかが、いやおうなく頭に入る、そういうくせがなくなっているのではないかと心配します。新聞は総合的人間力のようなものを育むのではないかと、その新聞の機能は何としても守るべきです。

そして、今回のような大惨事では、新聞は、メディアを持たない被災者の代弁者になってほしいと思います。

なかむら・じゅんこ 1947年生まれ。神戸市東灘区在住。95年、「東灘地域助け合いネットワーク」代表幹事、96年に「コミュニティ・サポートセンター神戸」を結成し代表に。著書に「大震災復興から六年、ボランティア・NPO活動の変遷」など。

## 日朝関係の歴史にもっと光を／『朝鮮通信使の足跡—日朝関係史論』を出版

京都造形芸術大学客員教授の仲尾宏さんから

### 会員消息 伝言板



私が本格的に日本と朝鮮・韓国の歴史を勉強し始めてからはや四半世紀がすぎた。晩学でこれといった特別な才能をもたない身空として徒手空拳。とにかく自分に興味を沸くこと、人はあまり注目しなくても、自分で調べたことを追求し、納得行く結論を導き出すことだけを目標に我流・無手勝流の研究を続けた。今回の著書は表題通り、日本と朝鮮半島の間

の歴史に、中世から近世にかけて重要な役割を果たした「朝鮮通信使」の諸相について近年書きためたもの、韓国での講演の記録、日本各地で新しく見いだした通信使にかかわる史料や文化財を調べた記録を採録している。

専門的な論考もあれば、講演録を補正したものもあり、記録もあるので読者はどこから読んでいただいてもよいのだが、専門書でもなく啓蒙書だけでもないことに戸惑われるにちがいない。まずは自分に興味のあるところ、興味をもたれたところのみを拾い読みしていただければ、と思って

いる。また本論とは別に「特論」として「尹東柱のいた頃の同志社」という一論を編入した。これは1942年10月という戦争真っ只中に同志社大学英文科に編入学した朝鮮半島の若き詩人・尹東柱がどんな雰囲気

の学園で学んだか、戦後、自由自治の学園を標榜していた同志社が、またそこにいた教職員たちが当時、どんなことを考えたり、どう行動したりしていたのか、を問い、その記録を綴ったものである。凄まじい軍国主義と天皇制の鉄の嵐の中での抵抗はどこまで可能だったのか、また如何にして、彼らが「転向」せざるをえなかったか、さらに戦後そのことをどのように「克服」したのかなどを知り、考えてみたい。

また私は朝鮮通信使のことは室町時代、つまり朝鮮王朝前期、そして文禄・慶長役(壬辰倭乱)期をはさんで、江戸時代(朝鮮王朝後期)を通貫してとらえる必要を感じている。長い日本と朝鮮半島の歴史、500年の間にどのような関係とひずみがあったのか、それを知ることで、これからも同じ東アジアのもっとも近い友人として両者が対峙しあえるかの教訓が総合的にえられる、と思うからである。

昨年で「韓国併合」から100年を過ぎた。しかし私たちが解決しなければならぬ課題はまだ大きく減ったわけではない。そのことを少しでも多くの人びとに考えていただく一助になれば、というのが私の願いである。明石書店刊、定価3150円(税込み)

## スケッチかんさい

### 三寒四温

大阪の四ツ橋筋を歩いて渡辺橋に近づくと、旧朝日ビルが見えてくる。丸みを持った、角のとれたビルに親しみと懐かしさを感じ、スケッチペンを走らせた。川面をわたる冷たい風で指先が思うように運べなかったが、背中に感じる日差しは春の訪れを思わせ、まさに三寒四温だ。

私はNPOの代表をしながら大学でボランティア学を教え、ボランティアの活動資金を得るため、水彩画やエッセーを描いている。関西は歴史、文化、産業の発展が目覚ましいのに、「復権」「復権」と言われているのは残念だ。関西に住む私たちの周りに関心をもつと、不思議に元気や誇りがでてくる。そんなきっかけになればと、しばらく連載にお付き合いください。

あつた ちかよし  
熱田 親憲

大阪市北区中之島3-2-4(旧朝日ビル)

## 5月14日に「改めて生命(いのち)を問う」講演会開催

やまぐちクリニックの山口研一郎さんから

## 会員消息 伝言板

「現代の生命」について問うた『生命—人体リサイクル時代を迎えて』の出版にあたって、講演会「改めて生命を問う」を5月14日午後1時半から5時半まで、高槻市野見町の高槻現代劇場文化ホールで開催します。資料代1000円。

講師には、1974年に『生きることの意味』を執筆して数カ月後、一人息子の岡真史君を亡くされて以来40年近くにわたり、親鸞の『歎異抄』を通じて「いのち」を問うてこられた作家の高史明(コ・サミョン)氏を迎え、「現代科学・医学といのち」について語っていただきます。高史明氏は、大著『月愛三昧—親鸞に聞く』(大月書店)に以下のように書いておられます。

「思えば現代人は、いながらにして世界中の人間と語り合えるのです。しかし、その記号と機械を通しての対話は、そのまま人間の五感の機械化に通底しているのではない。五感の根っこの解明が、人間の五感の崩壊を促してい

ることはないか。家庭が壊れ、村や町が壊れ、国が壊れてしまいます。自然破壊、地球温暖化の危機が警告されている。しかもその自然破壊とは、決して人間の外の自然のみを指しているのではないのです。科学と技術の展開は、そのまま人間の心身をも破壊していると考えられます」

また、医療や農業・食品におけるバイオテクノロジー(生命工学)に長い間警告を発してこられた天笠啓祐氏(市民バイオテクノロジー情報室代表)に、現代の生命操作や遺伝子操作が、生物や人類、ひいては地球環境に何をもたらすのか(昨年10月に名古屋で開催された、第10回生物多様性条約締約国会議=COP10の報告も含め)をお話しいただきます。

加えて、今回の執筆者に本書の内容を紹介していただきます。さらに、長年演劇・朗読活動を続けてこられた舟木淳氏(俳優、演出家)に、宮沢賢治や谷川俊太郎の作品を通じて「いのちへのメッセージ」を伝えていただきます。

問い合わせは、やまぐちクリニック(072-690-5265、平日9時~18時)まで。

## 方向転換を夢見る

ライフスタイルコンサルタントの森孝之さんから

昨年末、人口約1万6千人の沖永良部島で数日間を過ごしました。ブーゲンビリアが咲き、寒くもなく暑くもない気候でしたし、黒糖の焼酎やマグロ丼も美味しかった。しかし、そこにわが国の縮図を見てしまい、戦慄を覚えました。

珊瑚礁が隆起した島で、川がありません。雨は地下水となり、地底に流れを作り、その水を汲み取れる随所で集落が形成された島、とみてよいでしょう。その昔は、棚田を作り、湿田を守り、海の幸を尊び、自給自足していた島です。その後、島津藩の搾取にはじまり、今は農業の工業化という国の政策の下で自己完結能力を失っています。戦後の一時期は人口3万人が食料を自給していたようですが、今や半分の人口で1割にも満たない。

実は、西郷隆盛島流しの足跡を求めて訪れましたが、着いた日から水問題に集中し、「クラギー(暗川)」などと呼ばれる水源めぐりの日々になりました。それは、近年の水問題に焦点を当てがちになる旅のせいでしょう。その始まりは、数年前3度目のエジプト旅行です。オールドカイロでは篤志家が道行く人に水瓶を用意し、冷えた水を自由に飲ませる文化が生きていました。おそらく古代ローマ帝国時代の文化の継承でしょう。

昨年初夏のトルコ周遊でも、オールドカイロ同様に水道橋の痕跡を見ました。案の定、街の随所で道行く人に水を自由に飲ませる設備やその跡が見られました。秋のイタリア・トスカナの旅では、井戸を中心に開かれた城郭都市の景観を残し、オリーブオイルや酪農品の産出に精を出し、中世を彷彿させる観光都市として賑わう姿を満喫しました。

昨年最後の旅になった沖永良部島では、水源は健在なのに農薬汚染が原因で飲めません。鹿児島県は、県の減反目標値の多くをこの島に背負わせたようで、水田は皆無状

態です。圃場整備された畑の多くは、過剰なまでの農薬散布を求める花卉栽培に特化する傾向で、その現金収入で生計を成り立たせる島になっていたのです。もちろん圃場整備した畑地は、大雨のたびに赤土の濁流を海に流れ込ませ、漁業を衰退させていました。

実は東トルコ周遊の旅ではこの逆の心配をしています。古代文明を発生させた大河を堰き止め、農業に力を入れていたのです。いずれ川下のシリアなどと深刻な水争いを生じさせるでしょう。それは近き未来の、世界の食糧事情が一段と悪化したときではないでしょうか。

かねてから私は、工業化と大企業化というわが国の目指す方向に不安を感じてきました。それは、次々と買い換えなくなる工業製品を大量に生み出し、それで稼いだ金で食料などを輸入する方向です。つまり、あればあるに越したことがない換金製品の産出に特化し、なければ生きられない生命維持物資を買い求める方向です。しかもその過程で、水や空気から大地まで汚してきました。この縮図を、沖永良部島に見出したのです。

早晩世界は、安い食料や資源を買い漁る時代から一転し、資源枯渇問題や深刻な食料不足問題に直面するでしょう。そうなれば、これまでのように「最大の消費で」ではなく「最小の消費で最大の豊かさや幸せを手に入れる」方向や、生命維持物資の自給率向上を目指す方向へと転換せざるを得ないでしょう。その時に、沖永良部島はどうなるのでしょうか。

今からでも遅くない、と帰途の機中で考えました。かつてわが国は、絢爛豪華に憧れる太閤に対して、「ワビ」「サビ」という美意識や価値観で対峙する利休を輩出し、その美や価値を世界に認めさせています。この最小の消費で最大の豊かさや幸せを手に入れ得る道を見直し、沖永良部島をも潤す新しい方向を、急いで切り開けばどうでしょうか。

## 吹田市制70周年記念「市民平和学習ブックレット」をまもなく発行

吹田市役所・平和事業担当の鈴木常勝さんから

## 会員消息 伝言板

郷土史の枠内で、受難の歴史の視点から一というのが、かつて多くの市町村から発行された平和学習冊子の基調ではなかっただろうか。

戦争とは「互いの殺し合い」なのだから、敵国の兵士、民衆の被害もある。ところが、学校教育では、阪神間の空襲被害を描く『火垂るの墓』、広島原爆投下の残酷さを描く『はだしのゲン』、沖縄地上戦の悲惨さを描く『ひめゆりの塔』は取り上げられるが、「敵」だった外国人の、あるいは日本軍占領地の人々の戦争による惨禍が語られることは少ない。社会人の現代史講座も「他国の戦災」には集まりがよくない。

我が身、我が家族、我が同胞が受けた被害を忘れないのは当然だ。だが、兵士の戦死、戦傷、戦病死、餓死は各国共通の悲劇であるし、爆撃、空襲による市民の悲劇、家族の死や離散は国境を越えて世界に広がっている。現在の居住地での戦争被害をよく知れば、地方あるいは外国の戦争被害がより身近に迫ってくるということにはならないだろうか。戦争の悲惨さを「平和のために手をつなぐ」きっかけにするには…。

今回、吹田市発行の平和ブックレット(以下、平和誌)は、「身近に住む戦争体験者から話を聞く」ことを第一の狙いにした。戦後も65年。敗戦の年に20歳の青年男女が、85歳の高齢になっている。



体験を話す体力も、記憶力も低下してくる。そのため、今回の平和誌は、過去に吹田市が発行した紙誌に掲載された「戦争体験記」一戦死や空襲、抑留などの被害体験も外国人への殺戮や暴行など加害体験も一を、先の世代の<心から

の叫び>として受け止め、掲載した。吹田空襲を中心とする多様な被害体験と、出征した兵士の戦地や外地での加害体験を含む苦難を、体験者が公にしてくださったのは、体験談を受け止める市民の平和活動があったこと、また、いささかなりともその「平和の声」を行政紙誌が記録として残してきたことによる。

戦争体験者の孫や曾孫の世代に当たる20歳代の若者が、今回の平和誌にどんな反応を示すのかが楽しみだ。編集するに当たっては、読み手に「戦争反対!」との結論を示したり導いたりするのではなく、「地獄よりも酷い戦争」の実態、隣組での「戦争協力のカラクリ」を伝える役割を果たそうと考えた。

戦中の市役所は15歳の青年に向って「起て、決戦の青空へ」と飛行兵への志願を呼びかけた。隣組は出征兵士を励まし、戦争勝利のちょうちん行列を組織した。焼夷弾への対処法、防空壕の作り方を教える国策紙芝居も演じられた。国民ぐるみの戦争協力は、戦死、戦傷や空襲被害、原爆被災の結果しかもたらさなかった。体験者たちは「戦争被害は私たちの世代で終わりにしたい」との言葉で語る。現在の市民は戦時下の国民動員のやり方を学ぶことにより、今後あるかもしれない戦争宣伝を見抜く力がつくのではないか。

歴史はなつかしさで勉強することもあるだろうが、未来のために学ぶ素材ともなる。「戦争体験者の叫び」を受け止め、「国民動員の仕掛け」を学んでもらうこと、その上で若い読み手に「結論は自分で」とまかせるといふような吹田からの発信であればと思う。

(カットはいずれも戦時中の軍事郵便絵葉書)



## 2011年 スケッチ情報そのI

イラストレーターの永井ひろしさんから

「小生、約7年前から始めた『スケッチ教室』、飽きもせず続けています。今年の年賀状の添え書きだ。

アウトドア大好き人間ばかりだけど、冬期は植物園の温室だったり地下街だったり。でも、後者はすんなりと認めてもらえない場合も。で、昨冬などは地下街のカフェから外(地下街)の歩行者を描いたりした。店の人も見て見ぬふり、ありがたかった。

でも、原則的に前に行った所は行かない方針だから早晩行くところがなくなってくる。

公営の地下街とか大型のショッピングセンターは、オープン当初は満員だが、半年も経てば平日の午前中なら閑散としている。なら、スケッチぐらいさせてくれても良さそうな

のに、われわれが目立つのか、警備員がやってきてイラストのような仕儀に。前もって申し入れてもほとんど駄目だった。

その点、人に来て欲しい社寺・教会は前もって断っておけば大歓迎される。この違いって何なのだろう。

来週もまた、スケッチに出かけます。



## こんな話 縁側

漫画家の河村立司さんから

## 会員消息 伝言板

いっせいに芽吹く春。虫も獣も、わが物顔で出てくる。村の集落にも行商人がつぎつぎやってきて庭先も縁側にもぎやかになった。

「昔なあ、頭から大きな毛布をかぶって、ロシアの人がきたんよ」「大男での、毛布売りじゃった」と祖母の話聞いてから何年かのちの学校帰り、いちど大男を見た記憶がある。

昼さがり、大きな鹿毛色の毛布が、のっそ、のっそと坂道を登ってゆく。女の子は急いで隠れたが、私たち小3は逃げ腰で尾行した。その毛布は大きな屋敷に入り、なかなか出てこない。やがて赤ら顔がニューッと現れた。毛布は売れたらしい。金色の毛をした、きょてえ(怖い)笑顔だった。あくる日、先生にも話すと、ロシア革命から逃げてきた白系じゃと難しい話をしてくれた。

土筆やわらび採りに手軽な竹籠売りのじいさんは、棒の両端にぶら下げてやってきた。

大阪・天王寺の虫下し売りはアコーディオンを弾き流しながらやってくる。ほうらく売り。チンチンドンの飴売り。筆や和紙売りのおっちゃん。黒い大風呂敷を自転車に積んできて、日当たりぼかぼかの縁側で弁当をひらいていた。母親の出すお茶を飲みながらの長尻。おもしろい話をしながら、私にいつも鉛筆1本くれた。

なんたって、毛布売りの大きな異人さんと目が合ってしまった、あの日のサスペンス。

ぜったいに、忘れない。



### 新紙面をお送りします / 5月号から

会報は5月号から新しい紙面になります。より読みやすく、より役に立つ内容をめざします。

これまでご協力いただきました「現場地域から」「オピニオン」「会員消息伝言板」はとりやめます。代わりに、みなさんが日ごろ取り組んでおられる活動を紹介する「トピック・ナウ」欄と、時々のお出来事についてご意見を募る「視点／私点」欄を新設します。

「トピック・ナウ」欄には、企画されるイベントの案内、新刊著作のご紹介などのお知らせをお寄せください。会員同士が刺激しあえる情報が満載のコーナーをめざします。原稿は200字以内をお願いします。より多くの記事を掲載するため、ご協力をお願いします。200字を越える場合は事務局で手直しさせていただく場合があります。写真、イラストがありましたら大歓迎です。

「視点／私点」欄は、500字までにまとめてお寄せください。

巻頭の「編集長インタビュー」、4月号から始まった「スケッチかんさい」、巻末の「中之島から」は続けます。投稿先は次の通りです。

メールの場合: square.k@asahi.com

ファクスの場合: 06-6443-4431

郵送の場合: 〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞関西スクエア事務局

なお、会報は朝日新聞のホームページ (<http://www.asahi.com/kansaisq>) に掲載しています。5月号以降は、お寄せいただく「トピック・ナウ」のイベント情報や、「視点／私点」の投稿は随時、掲載していきます。



## ああ、受験生

三木 栄 (編集局管理担当マネジャー)



先日、ふと立ち寄った本屋で懐かしい本を見つけ、思わず手に取りました。

「漢文法基礎」(講談社学術文庫)。著者は二畳庵主人こと大阪大名誉教授の加地伸行先生です。もともとは通信添削で有名な増進会(Z会)から出版されていた大学受験生向け参考書です。絶版となっていたのですが、昨年復刊されたようです。

30年以上前、受験生だったボクはこの本を買いました。

高校時代、勉強は大嫌い。当然、成績はさっぱりで、人並み以上なのは体育だけというダメ生徒でした。漢文なんてまさにチンプンカンプン。見かねた友人が「おもしろいので読んでみたら」と勧めてくれたのがこの本でした。

「基礎」とうたってはいますが、内容はとても高度です。それでも講義調で軽妙な筆致は読む者をあきさせません。そしてなにより、この本にあった「ポルノ漢文」は驚きでした。田舎の純情青年受験生には刺激的で、ニヤニヤしながら読んだことを覚えています。もっとも「受験に役立ったのか」と聞かれると、答えに窮してしまうのですが……。

「そんなにおもしろいなら読んでみようか」と思う方がいるかもしれません。残念ながら復刻版にはポルノ漢文はなく、変な期待をすると裏切られます。Z会発行の本もその後、ポルノ漢文は消えたそうです。ちなみに今もオリジナル本はネットオークションなどでびっくりするほどの値段で取

り引きされています。

参考書の業界も少子化などの影響を受け、厳しいようです。そんな中でも「名著」といわれる古い参考書には、版を重ねたり、復刊したりして生き延びている本がけっこうあるそうです。受験生だけでなく、青春時代を懐かしんで読む大人が多いのかもしれませんが。

ちょうど今(3月初旬)、京大入試のネット流出が世間を騒がせています。たかがカンニングか、入試制度の根幹を揺るがす大問題か。マスコミにとっても、どう向き合うかを考えさせられる「事件」ですが、入試が受験生にとって大きな重圧であることは今も昔も変わらないようです。そんな受験生に同情は禁じ得ませんが、「少しは勉強しておけばよかった」と後悔するボクは、若い彼らがうらやましくも思ってしまうのです。



この原稿を書き終えた後の3月11日、東日本大震災が発生しました。歴史的な大災害に、総・支局を含め、多くの大阪管内の記者も現場に入って取材しています。この原稿も差し替えようと思ったのですが、福島第一原発の事故など刻一刻と状況が変わっている中では、掲載時にピントがずれた原稿にもなりかねないと思い、あえてそのまま掲載してもらうことにしました。(みき・さかえ)

### 事務局から



▽私事ですが、娘が3月12日に神戸で結婚式を挙げました。前日、予想もしなかった大地震、大津波が東日本を襲いました。あまりの被害の大きさに、一時は延期した方がいいかと迷いましたが、関西出身で東京に勤務する新郎が、地震発生前日にいち早く帰省していたこともあり、思い切って挙行しました。東京から来る予定だった新郎の友人ら2人が足止めされましたが、何とか式と披露宴を終えることができました。阪神・淡路大震災をはるかに上回るこの未曾有の震災を教訓に、若い2人が危機対応力を磨いてくれれば何より、と思いながら、余震に揺れる東京へ「試練の船出」をした2人を見送りました。その後も「計画停電」に振り回され、「放射能汚染」におびえる東京で暮らす娘たち。大震災から立ち直った神戸から支えていかなければと肝に銘じています。(浅野)

### 被災地へ100文字メッセージをお寄せください。

事務局長の富永です。東日本大震災の被災地には、私の知り合いが多くいます。仙台、盛岡の両総局で合計6年、勤務していたからです。三陸海岸には何回も足を運びました。青森・八戸、岩手・久慈、宮古、釜石、大船渡、陸前高田、宮城・気仙沼、石巻……。サンマがおいしくて、新鮮なホヤは甘かったのを思い出します。3月11日からこのすべての街を飲み込んだ大津波のテレビ画像から目がはなせませんでした。沿岸地域では、津波避難訓練は何回もやっていて、その様子は岩手版、宮城版で何回もとりあげました。そのうえでのこの被害です。何と膨大な、と気が落ち込みます。でも、一方で、訓練があったからこの程度にとどまったのか、とも思いたい気持ちです。

被災地ではまだまだ困難な状況が続きます。寄り添いのメッセージが大事だ、と冒頭インタビューで中村さんがおっしゃっています。5月号では、「被災地へのメッセージ」を特集したいと思います。

お名前と肩書をご記入のうえ、100文字でお寄せください。100文字とするのは、できるだけ多くの方々に紙面に登場いただきたいからです。ご理解賜りますようお願い致します。

投稿は、この頁末尾の「事務局」欄にある住所、E-mail アドレスまでお願いします。

### 朝日21関西スクエア 会報 No.133

#### ●スタッフ

富永伸夫、浅野稔、安川嘉泰、深松真司、天野剛志、橋本正人、木村俊介、園真規子

#### ●事務局

〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞大阪本社内  
TEL 06-6231-0131 (内線5048) FAX 06-6443-4431  
E-mail square.k@asahi.com (PDF会報の希望はこちらへ)  
URL <http://www.asahi.com/kansaisq/>